
猫になって

Cufe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫になって

【Zマーク】

Z9531M

【作者名】

Cuffe

【あらすじ】

異世界トリップ？アルカディア？よくわかんないけど頑張るうか
！つてなお気楽主人公が逆ハー目指して進んでいくラブ（？）コメ
です

口算のやがてな出来事（前書き）

処女作です。誤字脱字があつたら「」一報ください（――）
感想を頂けると励みになりますつ

日常のややこしい出来事

毎日暇だ。

別に進学校に通つてゐる訳でもないし、受験生でもない。
ああ、フレッシュでもないね。高2だから微妙かな。
若さはあるつもりなんだけどさ。

何か目新しい物を探すのが癖になつていて。
飽きっぽい性格は直す気がないのでそのまま。

でも。今のところは、探せば毎日些細な発見はあるんだ。
例えば今の季節、小さな桜の花びらが窓からひらりと舞い込んで、
ノートの上にのつていたり。

壁にスマイルマークが書いてあつたりとかね。

そんな穏やかな毎日が続いていた。友人には枯れてるとか言われる
けど。

「ね、なんか買わない？マジで今金が足りないんだよー」
昼下がりの教室、澄んだ声が響く。

私の悪友の鈴。髪サラッサラ、お皿々クリックリのお人形さん。容
姿だけなら。

でも性格は三枚目。いつも金欠で、一人フリマを開いている。
物がどれも質がよくてなかなか……じゃなくて。

「また？」この前も同じようなこと言つてたじゃん。あの時は？」

「ああ、椎香？えへ、もつ使つちやつたよ～。」

「この馬鹿は金遣いが荒い荒い。訳分かんない」と金使つてゐるからなあ。

「全く……今度は何に使つたん？」

「ブルガリの香水と、ときメモGIRLと、ナイキのバイクかな？」

「おおう、今回も脈略ないね！」

「そんなことより何か買わない？なんでもいいからさーね？」

「そうだね～。」

何のかんの言つて毎回何かしら買つてゐる私も馬鹿かも。
ざつと机の上を見渡す。置いてある物は結構雑多だが、見る目は確かに
かなか大抵の物はいい。いつもこうは素直に尊敬。

と。なんとなく、ネックレスに目が留まる。何だらうこの色？
綺麗だなあ。光つてゐる光つてゐる。

手にとつて陽に翳していると、

「お姉さん、お日が高いーそれはアレキサンドライアーツといつ石が
はまつてて、結構値が張るらしこんだよーじつへじつ？椎香なら5
000円にしかやう！」

「らしこいで、自分で買つたんじゃないの？」

「この前道端で急に声かけられて、あげるつて言われたから買つち
やつたんだ。だから実質タダなの 大丈夫だから！多分」

「お前さ、知らない人に物もらつなつて幼稚園の時習わなかつた？」

「うん？よく覚えてない。で、買つ？」

怪しくても宝石に罪はないし、私はこれがめちゃくちゃ欲しい。
ちよびぢさつき某のブランドで遊ぶ予定がなくなつて、今手元
に5・000円ある。明後日にお小遣いが支給されるはず。

この間約0・1秒。

「よし買った！」

はい5000円！と渡すと、

「毎度あり！ほいよつ」

鈴が満面の笑みで投げてくる。

「ありがと！」

パシッとキヤッチして、鞄にしまった。

まだ売つてから帰る、という鈴を残し、一足先に帰ることにした。

家に着き、ベッドの上に未開封の宝石箱を置く。

鈴は気持ち悪くてつけなかつたそつだ。

気持ち悪いって何が、と聞くと、

「くれた人とか…。」

だろうね。下心一杯で渡した男をちらりと流した光景が目に浮かぶ。

鈴はそんなやつだよ全く。罪作りめ。

といつかそんな物貰う方も貰う方だが…私の手元に来たからいいか。

ベッドに倒れこんで、綺麗な宝石 なんて浮かれていたら、弟が急に入ってきた。

「姉ちゃん、飯だつてよー！」

ノックぐらいしろよ！と怒つて誤魔化しつつ、箱を大急ぎでベッドの下へ放り込む。

カラスのような弟にとられたらもう終わりだ。

いつもなら取り返せても、親に適当な難癖つけられて奪われること
は分かりきってる。

だってこんなに綺麗だしね！

私は隠した箱をそのままに、リビングへと降りていった。

今日の夕食は何かなー。

真夜中。

箱の存在をすっかり忘れてて眠りこける私は、気付かなかつた。

いつの間にか、箱がなくなつていた事に。

そして空中に浮かんだ宝石から出た柔らかな光が、一瞬私を包んだ
事に。

朝、目覚めると、なんだか体がダルかつた。
激しい運動をした訳でもないのに。

試しに熱を測つてみると、37度5分。やつぱ微熱か…。

家には今、私一人しかいない。

両親は、職場が遠いので私より早く家を出る。今日は弟も部活の朝練だつたつけ。

…じゃあ学校休んじゃえー熱あるし。

といつ事で、ヨーグルトを食べて解熱剤を飲み、一度寝の至福を味わうことにした。

どの位寝たのだろう。陽はすっかり上つていた。
携帯を見ると11：20。一度寝始めたのが8時だから…結構寝たな。

体も楽になり、逆に軽くなつたような気すらしてきた。

今50m走やつたら6秒いけそう。でも本当に走つたらこいつもの如く8秒後半、なんて悲しいので走りません。それに疲れちゃうし。

鼻歌まじりにお粥を作る。何しよう。暇~暇~

あ…桜。咲いてる。

よつしゃあ花見だ花見!とテンションが上がり、手早くお粥を食べ終えて部屋で着替えていると、机の上の宝石が田に入つた。

忘れてた！あんな所に置いたんだつけ？

まあいいや、珍しく出かけるからつけていこつと。

その時は特に何も考えず、ネックレスをつけて外に出た。

こんな花粉のひどい日にくしゃみが出ないなんて変だつた。でも天気予報を見ていない私は知る由もない。

ぶらぶら歩いて近くの広場に行く。平日だからか、ここがあまり知られていないからなのか、昼下がりの公園には人っ子一人いない。人いなさすぎだろ。寂しいよ。なんて独り言を言いながら、持参したビニールシートを敷き、桜の下に座つてのんびりと景色を眺めていた。

ふと気づくと隣に黒猫が。

首輪ついてないから野良みたいだけど、毛並みつやつやだな。何食つてんだろう。

「なあ、お前の名前、私が決めてやるつか。」

猫が、みやー、と鳴く。これは肯定したってことで。

「うーん。黒猫だし…女の子だからヒドガーもアランもだめだよね…ポーちゃんはどう？」

一気にニヤーニヤーつるさくなつた。失礼な奴。

ナーデナーデしてこると、猫がふりつと向かいの道へ出て行ってしまった。

ツレないね、でもそんなところが好き。

また会おうね、ポーちゃん。あと、クンシンちゃんのボーッとした子と名前似てるしめん。

後ろ姿を見送っていると、車の音がした。

こっちに近づいてる、と気づいた瞬間、無意識に走り出していた。

このままじゃ事故が起きると本能が警鐘を鳴らす。

あの猫は私が名前をつけたんだし。田の前で死んでもらっちゃ困る、せめて交通事故死だけでも回避したい。フラグなんて立つてない立つてない！

あっという間に猫に追いつき、掴んで放り投げる。

目前に大きなダンプの影が。

バンッ！

軽い音。

激しい衝撃で、意識が切れた。

猫助かつたかな…。

口算のやがてな出来事（後書き）

矛盾があつたので直しました。
すみませんっ（^v^-）

狭間に落ちる（前書き）

様子が上手く伝わってるかちょっと不安です。

狭間に落ちる

はつと気づくと、私は見知らぬ場所に横たわっていた。

ああ、ここが死後の世界か。

しばし、呆然。

親より早く死んでるしな……葬式で泣いてくれる人居るのかな……
生命保険は……家の鍵ちゃんとかかってるかな……ガス消したつけ……

「……だから……！……で、あの子……。」「自分で決め……！輪廻……！」

人が感傷に浸つてゐるのにうるせえ……って……あれ?

「だから!起きたら本人に聞きなさいよ!」

なんだなんだ!と飛び起きたら、白いゆつたりした服を着た美人3
人が急に黙り込み、一斉にこちらを振り向いた。

怖つ!

「「「何か聞いた?」「」「いえ何も」

はい即答!美人の眼力には逆らいませんよ私は。

「…しゃあねえな。さつきの通りでいいな?」
と右はじのきらきらしている金髪イケメンさん。
「ええ…もう起きてしまったし。」

左はじの大人なムードのお姉さん。

「一人位なら平氣だよ、お姉ちゃん達心配しすぎやー。」
と真ん中のやんちゃ系赤毛の女の子。

ん?お姉ちゃんたち?…イケメンさんは女性でしたかすみません。
なんか…神様、かなあ。信じてなかつたけど。
勝手に品評してすまん。

気を取り直して、お決まりの質問から行つてみよう。

「あの、 じいは?」

「じいが?なんていうか…狭間だよ、神界と冥府と人間界の。んな
事はどうだっていいからちょい話しうけ。お前、なんか変な物持つ
てるだろ。」

「いやよくないですし持つてな「持つてなかつたらじいには居ねえ
よ」すみません」

くそ、日本人の悪い癖が…

「ねえお嬢さん。じればじいで手にいれたのかしら?」

「え、えと、買いました。5000円です。」

要らん事まで口走つてしまつた。恥ずかしつ

「円?ああ、なんて書つたかしらあの国…日本から来たのね。50
00円つてどの位でしょ?」

「お姉ちゃん、家が簡単に買えるくらこだよー。」

それいつの時代？いや、都合いい勘違いだけど。

「まあ、じゃあ」の価値がわかつてゐるのね！」

価値とな？

「おじ早とちりすんなよ姉貴。 大体、なんでこれがコイツの世界にあるんだよ。」

「スミマセン、価値つて？」

「お前は知らなくていい。」

ふ、とイケメン美女が大人美女に視線を送る。
大人美女が目を閉じ、ネックレスに手をかざす。なんか光っちゃつたよー？

「契約されてるわね……」

「けいやく？」

「満ちた月の夜。その光の届かぬ漆黒で、体と宝珠と間を置きて保つ。」こんなことしなかつた？」「

昨日は満月でした。ベッドの下に突っ込んで寝ました。心当たりはバリバリあります。

顔に出ていたらしく、イケメン美女さんにため息を吐かれた。

「その上血までかかってる。全く…厄介だな。」

「あの、私はどうなるんでしょう？」

「消える。」

いやあああーんなのゴメンだ！

「大丈夫。前世、つまり今持つてゐる記憶ね。それを失くして新しい生を受ければ問題ないわ。」

それ言つてること同じだよね。同じだよね！？

「大丈夫だよお姉ちゃん達。宝珠の契約が効くのはその世界だけだから、別の世界に飛ばせば平氣！それにこの人、寿命終わつてないよ。契約でついた力のせいでの死んでるから。」

「あら。本当ね。」

「じゃ、生まれ変わらせるか。拾い物にはお礼一割、好待遇にしてやつから心配すんな。」

「好待遇つてどういふことですか？」

元の世界返せ！つてのはダメなんだろうな。話聞いてて思った。

「えつとね？普通の人間は死んだ後冥府に行つて、修行して、ある程度功德つていうか、経験値が貯まつたら次の生を送ることになつてるの。ここまでいいかしら？」

ふむふむ。

「で、私たちが次の生の案内人つて事。あなたが死んだ時、そのネックレスのせいで引っ張られて私たちの待つてゐる場所に落ちてきたんだよ。だから普通修行後に合つ筈なんだけど、急に会つてゐる状態なんだ。」

なるほど。

「輪廻の仕事は、次に生きる場所ごとに俺たちが分担してゐる。容姿

とか能力はくじ引きで決まる。後はランダムだ、ほら、天は一物を
「えずとか聞いたことあるだろ？」

くじ…前世の私はくじ運が悪かったのか。て事は好待遇つて！

「1人に3回引いてもらつんだけど、あなたは私たち3人のを1回
ずつ引かせてあげるよ。だから9回つてこと。いい？」

好きなのは選ばしてくれないんだ。

でも、がんばろう！絶対ウハウハな人生手に入れてやる！くじで頑
張るとかどうすりやいいのかわかんないけどね！

狭間に落ちる（後書き）

くじつて気合を入れても最悪のを引かざるといふことがありますよね。
神も仏もないです。（；・；）

この子には頑張って欲しい。

新幹線、通路側の席を引き当てた私の代わりに（笑

べじ引き（前書き）

主人公がチートへの第一歩を踏み出しましたw

くじ引き

3人が3つずつ箱を持ってくる。まんまマジックボックスだな、見かけ。

「はいどうぞ？お引きくださいな。」

「ほら引け、早く。」

「はーい、こつから取って？」

1枚1枚、念を込めながら引いていく。
これで9枚目だ！

「ん、じゃ開いてみせて〜？」

美女から引いたのが、

1枚目：精悍、男（アル）

2枚目：運動高能力（アル）

3枚目：超記憶（魔力無し）（アル）

イケメン姉さんから引いたのが、

1枚目：容姿端麗、女（ザナ）

2枚目：長寿（ザナ）

3枚目：魔力無限（ザナ）

やんちゃから引いたのが、

1枚目：眉目秀麗、猫、雌（桃）

2枚目：知能高（桃）

3枚目：長寿（桃）

私、超頑張った！！

でもさ、なんかさ、色々突っ込みたいけどさ、とりあえず

「私の種族はなんですか…。」

「猫と人はどっちだ？」

「人で！」

「男と女、どっちがいいかしら？」

「女でお願いします。」

「いいの～？ 猫、変身能力つくれり～長寿になってるのにい。」

う…猫又か…捨てがたい。

「いいじゃない、両方あげるわ。どっちの姿にもなれるようにして
おくから。」

「ありがとうございます。」

いやん、お姉さんいい人！

その後色々あり、私の来世はこうなった。

- ・容姿端麗 猫 + 女性（ザナ + 桃）
- ・運動高能力（アル）
- ・魔力無限（ザナ）
- ・超記憶（…今の記憶が引き継がれるだけらしい、アル）
- ・長寿（ザナ + 桃）

これはすごい。私ってチートじゃん。

「この桃とかアルとかは…？」

「それはね、それぞれの担当の世界のことよ。私が送る世界はアル
カディア。」

「オレはザナドウだ。」

「あたしは桃源郷。」

アルカディアと桃源郷、同じ意味な気がする…。ザナドウもそらう
んだろうな。

「私はどこに行くんですか？」

「あ、どこに行きたい？アルカディアは牧歌的よ。あなた達の言つ
中世かしら。」

「ザナドウは…かなり高度な文明の元で栄えてるといった所か。」
「桃源郷はもともとあなたがいたとこだよ？だから送つてあげられ
ない。」

マジっ！あんな所が桃源郷だったのか。ま、私の性にあつてるのは
アルカディアかな。

「アルカディアでお願いします。」

「そうすると、あなたはザナドウの魔力をアルカディアで使うのね
…。使つてるものが違うけど呪文は同じだし平氣だと思つ……もし
かしたら副作用があるかも知れないわ。」

「副作用？」

「ん、お前たちは呼吸で酸素を取り入れて生きるだろ？ザナドウで
は窒素を吸つてる。窒素は桃源郷の大気にも含まれてるから、ザナ
ドウの生物が行つても大丈夫だ。分圧と大気圧がヤバイから死にか
けるけどな。それと同じで、ザナドウの魔力はアルカディアにもあ
るが、アルカディアで使える奴は殆どいないつつーこと。」

・・・難しい。死にかけるつて、大丈夫？

「簡単に言うと、アルカディアでも気にしないで魔法が使えるつ
てこと…こつちで調整しておくから、気にしなくていいよ。」

わかった！ありがとうやんけ。何気なく一番頼りになるね。

「じゃ、アルカディアへは私が案内するわ。さあ行きましょ！」

2人の神様もどき達と離れ、アルカディアへと広い回廊を歩く。

興奮？いやいや。

郷愁がマックスにきている。

地味+刺激的生活もとれる事なんてうまい話そうそうないだろ！！
と自分を励ましてみても、家族になんも言わずに別れてきちゃった
んだと思つて、やりきれない。

何か感じたのか、美女さんに話しかけられた。

「こめんなさいね、宝玉なんて知らなかつたわよね。

「いや・・・」

知らない。でも、この神様のせいじゃないんだから。
なら責めたつてしようがない。

しうがないんだ。せめて家族が泣いてなかつたらいいと、そう思
う。

うん。私らしくない。前を向いて行かないとね。

アルカディアについて、色々聞いておかないと。
改めて美人さんをマジマジと見る。

いやあ、このスッキリした鼻梁。涼し気な目元。加えてやたらとセクシーな唇。

髪の毛はつやつやで真っ直ぐに腰まで流れている。たまんないね、男だつたらまず落ちる。

やっぱ男になつても面白そうだったかな…。

「どうしたのかしら？」

不躊躇に眺めすぎたらしい。不安そうな瞳で私の顔を覗き込む美人さん。

いいねそのアングル。男だつたらイチコロだよ。

「や、髪の毛綺麗だな、と。」

それだけじゃないけどね。

「そりなの、わかる？こだわってるのよー！」
いきなり目が輝く美女さん。

ははは、またかの地雷？話長くなる？まいつか。

「もう5000年位前になるかしらね。すぐ尊敬している方に髪の毛を褒められた事があったのよ。まあすてきな御髪ね、って。でもう気合はいつちやつて。」

尊敬してるって誰なのか聞きたい所だがそれはいい。お姉さん5000歳超えちゃつてんのかあー。ひえー。

「トリー・メントとか使ってるんですか？」

「鳥居とメンゴ? 『いえ、なにか関係があるの?』

「いや、そうじやなくて、トリー・メントって言つのは…」

ダラダラと雑談をしながら、ついでにアルカディアの基礎知識もきいた。

聞くところによると、私はイレギュラー過ぎて神様（本人達否定）もどうなるかわからないそ�だ。

あんまり思わせぶりなフリは入れないで欲しいと心の底から思つたことは言つまでもない。

進んでいくと、大きな石のアーチと木の扉があつた。どつしづとした荘厳な薦の模様が浮き彫りにある。

「着いた。ここが入口よ。さあ、行つてらっしゃい。今回なおまけもつけてあげる。」

え、おまけつて… つと待つて待つて！
ちょ、まだ扉開けてないでしょー！

背中を押され扉に顔をぶつける、とおもいきやスルリと抜ける。

そこは眩しいほどの光に照らされたトンネルだつた。「ケそつな体勢のまま、私はより強い光の差している方へと、引っ張られるよう歩を進めていった。

そしてどんどん光が強くなつて、もう何もかもがわからなくなつていつた……。

ベジタル（後書き）

よし。アルカディア行ってみよう！

ハイテンポすぎるでしょ？？

作者自身、詠むのが苦手で深く考えない性質でして…
シリアルモードは最小限に抑えたいと思います！

行き先（前書き）

ちょっと不安ですがアップします。

先が見えない…何時になつたらヒーローが出てくるのか…

行き先

いつの間にか、私は落ちていた。
え、落ちていた！？

ぼすん。

「こやー！」

まさかの初期装備は猫形態か…。
生まれ変わつてもいらないみたいだし…あれ、もう尾が一股になってる。

こここの時間は午後みたいだ。木漏れ日が差している。綺麗なところだなあ。

あたりを見回していると、白い紙切れがあつた。なになに。

”これを読んでいるって事はうまくいったみたいね。

今あなたはすべての言語が使えるわ。褒めてくれたお礼よ
ゝ語で喋りたいと考えれば変えられるし、基本は聞く相手に合わせ
るようになっています。プラス、死んだ時の年齢のままなの。これ
もおまけ！

もつとも最初は猫だからわからないかしら。

猫の姿はあなたが救った黒猫ちゃんの姿で、とても可愛らしきのよ。
変身する時の魔力の使い方は、ぎゅつ、ばんつて感じ。簡単だから
心配しなくていいわよ。

じゃあ頑張つてね。”

知らないうちにチート性能がアップしてたみたいだ。
いや、それよりぎゅう、ぱんつてどうやるんだる。

とつあえず中一いつぼく由からビームみたいなイメージで…

イメージで…

…熱つ！由が熱い！由は駄由だ、洒落にならん。
じやあ、二股の尾の先に集める感じで…いい感じかも、なんか気持
ちええ…

尾の先にじんわりと温かみが集まる。そこから一気に体中に広げる
感じで気合をいれた。

人間～にんげん～NINGEN～！～！

シユルツ…

効果音が変だが、人の姿になつたっぽい。

やつた、あんなおぞなりな説明で変身を会得したぞ！

…でも全裸だ。ちょっとこれはひどい。うん、まあ人間…そう人間
…。

ソックロでTシャツとジーンズを思い浮かべて化け直しました。す
みません。

どちらにしろこの世界の服がどんなものか知らないし、多分この格

好みのままじゃだめだろ？

格好といえば、私は「容姿端麗」を貰っていたはずだ。自分の顔が見たい！

ここはかなり重要なパートだ。第二の人生において。

鏡、鏡… そうだ水鏡！ その辺に泉はあるかな？

ひとまず動きやすい猫になつて、野生の勘の赴くまま泉を探、せたらしいけどそんなのないので水のコポコポいう音が聞こえてきた方向に駆けていく。

あの3つ（容姿、運動能力、魔力）以外は標準スペックなんだな。異世界補正とかないのか。

あ！ 泉発見！

きれいな水だな。さすが牧歌的というだけある。

さつと人に化ける。ヤバい、上達が早すぎる。天才かも！
・・・自分をおだててどうする私。

ひとまず顔だ顔。

どれどれ…

つ、これは…！

水面には、非常に、ヒツジヨーに可愛い美少女が映っていた。サラサラと風に流れる黒髪に、涼やかなブルーブラックの瞳。顔の輪郭もシャープで絶妙なバランスを醸し出している。

うん、まじうことなく容姿端麗だ。

ちょっととタレ目なのも我ながら愛嬌がある。

でもさ、どう見ても15歳以上には見えんよ。

ここでもまた日本人クオリティーが發揮されたか？お姉さん私を何歳だと思ってんだ。

まあ、外見だけだし化ければいいか。他の人にも化けられるのかな？

試しに、アルカディアに案内してくれたお姉さんに化けてみる。

…なんか少し違うけど（主に胸の大きさとか）「コレくらいならイケる！

何も考えないで化ける本来の姿より、なんとなく暑い感じがするの

は魔力とやらを使ってるんだろう。大したことないんだけどね。

ついでに男にもなれることを確認。

背が高いってこんな世界なのかと感慨を覚えたよ…ホント背が低いつてやるせない。

一通り試してみて少しつかれたので、エネルギー消費の小さいらし
い猫モードになつた。

なんだかんだ言って、猫つて案外楽でいい。

尾を一本にしなきや怪しいのが難だけど。

因みに私はロシアンブルーみたいな猫らしい。ポーチャんと同種。美猫だね。でもポーチャん程黒くない。灰色の方が正しい気がする。

その後。

泉の木陰に座つて今日の予定を立てることとした。

さて。普通なら「」で王子とか騎士が来るのを待つのがセオリ一だが、生憎と私は猫なので一目惚れされることはない。万が一拾われても下手に政情の安定してない国行つたら危ないし。どうせなら調べ上げてイケメンの王子様（無論騎士団長）で優しくて、養つてくれて、優しくて（大切なの」「二回言いました）、「頭も冴え渡つてゐる人の所に自分から拾われに行つてやろうつじやないか。ははは、この美貌をもつてすれば如何な聖人君子でもゲット可能だぜ。

てな訳で、街行つてみよー！これもまた王道の一つだし！ギルドとかあんのかな。理想の王子の情報を集めなきゃね。そうだ、服装も調べとかなきや。

とりあえず最初の目標は優しくて格好良い王子様をみつける事、かな。

街に出なすことにな对话にならぶ。よし、レッツゴー！

気の向くままに小径を歩いていると、標識があつた。

見慣れない文字を見て、「サイズ1km」「5km=ネベ」と

読めた時は悲しくなつた。

英語の勉強とかまるで無駄か。

どっちに行こうかなあ。

近い方でいいか。サイズ行こう、サイズ。

左の道を選び、のんびりと森の散歩を楽しみながら行くことにした。
サイズってどんな所かな…大都市は嫌かも…。

行き先（後書き）

因みに作者は田舎に住んでおります。

名前は少し凝つてみました^

小ネタです。わかつた貴方は素晴らしい！

魅力の効果（前書き）

ふわっとした猫も好きですが、すらっとした猫が好み。
つてどうでも良いですね。5話どうぞ。

魅力の効果

い、い、嫌ああーついでこないでえええ！

後ろを振り返ると猫の大群。

猫好きだよ、可愛いや、でもここまでもへるヒシユールとしか言ひようがないよおおー！

こんな事態に陥つたのは一時間くらい前。

森の小径を歩きながら、このままじゃ着かない気がする…と焦つていたら、

薄暗くなつた頃、ようやく前方に明かり発見ー！猫つて歩幅小さいなあ。今更だけど。

迷子にならなかつた…じゃなくて街についた嬉しだで、こちあこちあと鼻歌を歌いながら駆け込んだ。

おおー、中世ヨーロッパ！万歳！

石畳の道路に感激していたら、いきなり前のめりになつてズッコケて、頭を打つた。

痛たた～、と思って起きあがり、振り返るとオスらしきトラ猫が。

眼光鋭い。ギラギラして。

流石に猫のガン飛ばしはモノホンみたいだな、と呑気に構えていた。

・・・でも、何か変だ。気持ち悪い。

じりつと後ずさる。と、ジャンプしてきた！
えええええーーいやあああーー！

飛びかかってきたトラ猫をとつそにかわし、とりあえず猫パンチを

顔面にお見舞い。

私を怖がらせた罰を受ける猫め！

そして走る走る。ヒット＆ランが勝利の鍵さー

面食らつたような様子の猫。そして諦めるかと思つときや、

「ここやおーんーー！」

遠吠えした。遠吠えしたよコイツ！犬かおのれは！

ここで話は圓頭につながつてくる。

猫の一匹狼なプライドをどこに捨ててきたんだ、いや狼はイヌ科だけど、と怒りながら走っていたら、あの猫の子分達が回り込んでいたらしく、前の通路を塞がれた。

勘弁してくれ～！！！！

『お前だにゅ、親分が呼んでるのは。ああ行くにゅー』

『来にゅことどうなるかわかつてんにゅ？』

語尾がにゅあにゅあウルせえ！オスがやつても可憐くないから！でも、そうか、猫同士言葉が通じるんだ。説得できるかも。

『私じやにゅあにゅあつき怪しい奴がそっちに走つて行つて、追いかけたけど見失つたんだにゅ。手伝えにゅー』

私、乙。なんて貧弱な言い訳なんだ。

『わかつたにゅ。』

よしきた！やーいバー カバー カ

『一緒に追うにゅー！』

え、マジですか！

じゃあ、

『一匹いたにゅ。一匹はあつち、もう一匹はそつちにゅー！私はこっちに行くからあつちを追つて欲しいにゅー！』

苦しいな…。でもこの子たちは愛すべきオバカさんだからいけるだろ？。

『じゃあしじょうがにゅい、先に行くにゅ。親分は短氣にゅから早く見つけにゅいとだにゅ。』

やつたー！お人好しで良かつた！

『頼むんだにゃ！』
ダメ押しダメ押し。

一匹が駆け去った後、ふと気づく。

あれ、もしかして親分猫も猫又で超絶イケメンとかいう設定？私が勘違いしたのか？

実はイケメン王子の親友、みたいな。

『お姉ちゃん』

ここは大人しく捕まつてみるべきだった？でもやつを殴っちゃった
しなあ。

『お姉ちゃん！』

第一印象悪すぎだろ。いや、そこから和解するルートもありつけ
ありか。

なんんて、有り得ないね。これからどうしよう。

『お姉ちゃんつてばー。』

『「うえーー、エエエエ、エウしたんだにゃー。』

びっくりした。トらない詳細設定考えすぎた。噛んじやつた
じゃないか。

『「いや、つて…まあいいけど。僕について来て、早くー。』

わあ、可愛い的なコイツ。後10年経つたらお姉さんと「おこでつて
感じ。

アビシニアンっぽい。毛並みがつやつやしてるから飼猫なのかな?
ぽけーっと考えこんでいたら、子猫が急に森の方へ走り出したので、
大急ぎでついていく。
可愛い見かけによらず俊敏だねー。

ま、神様お手製チートの私には勝てないだろうが。と思^い考^{かう}が脱線し、
なんで追いかけてるのか欠片も考^{かう}えず^す哄笑。

持ち前の（というか貰った）運動神經でバネをきかせ、抜き去つた。

ついて来いつて言つてくれた相手抜いちゃだめじゃんよ私。

大人げ無い行動を恥じてその場に立ち止まり、彼を待つ。
まもなく追いついてくる子猫。

『お姉ちゃん? 足大丈夫? 早くー。』

ええ子やなあー!

気になった様子もなく、さつきと同じペースで走つていく。
しかも足気遣つてくれるなんて。嫁に欲しいー!

その後、入り組んだ路地を走りまわって気づいた事が一つ。

神様は運動神経よくしてくれたけど、体力は普通のまま。

あつという間に息だけ苦しくなり、もう子猫ちゃんに声を掛ける余裕は消え失せた。こんなことならもつと早く話しかければ良かった。といふか調子乗ってさつきのぐだりを何度も繰り返し、全力ダッシュしまくったのが悪いのか。

何にしても私はぜいぜい言いながら走っているのに、子猫が息一つ乱していないのを見ると切ない。

ふと子猫が立ち止まった。周りをわっと確認する。

『着いたよお姉ちゃん。とりあえず早く中に入つて。』

はあ、ようやく着きましたか！つて、ここ？

いやん、ムーミーのお家みたい！可愛い！

狂喜している私を尻目にさつさと入つていいく子猫。

え、行つちゃうの？待つて待つて、置いて行かないで！

周りが花壇に囲まれた、綺麗な白い石畳の小路が木の扉へと続いている。

ああもう…いい！最高だ、私ここに住みたい！

子猫に続いて扉をぐぐる。

『おい、どうしたんだキット？客か？』

田の前にいたのはスラリとした黒猫だった。

声も深みがある。人間ならさぞかしイケメンなことだらう。

『追われてたから助けてあげたんだよ。』

ありがとうキット君。名前可愛いな、英語からとつてる？訳ないか。英語ないもんね。

『はあ…新入りか？』

あれ、この黒猫どっかで…

『うん。 そうみたい。 慣れるまではここに置いてあげて欲しいんだ。ここ何年か、ここに来た猫なんて僕ぐらいでしょ。 師匠のボケ防止にもなるつて！』

『師匠って呼ぶな。 それに俺はそんな年じゃない。』

あ！わかつた！ポーちゃんにそつくりだこの黒猫！

『ポーちゃん…！生きてたんだにや！良かつたにやー…』

生き写しだ、いや本人…本猫だ！

『おいキット！コイツ本当に新入りか？下町言葉が染み付いてるぞ。』

『命の恩人をナチュラルに無視するな！

『うん…よくわかんないんだけど…真似してるだけじゃないかな。』

『しようがないな…お前…』

『うす…』

なんだなんだ、つい反射的に敬礼しちゃったよ。恥ずかしいなもつ。まだ息切れも直つてないのに。

『にゃーにゃー言わなくていい。耳障りだ。』

『はい…』

私も好きでやつてないって。猫つてこんなものかと思つてノリでやつたんだって。

楽しかつたけど。

『で、お前はどうしてここに居る?』

だからさつときキット君が言つただろ。貴様人の話聞いてないな?

『追いかけられて…』

『じゃなくて、どつから来た?』

ああそつちか、鋭いとこ突いてくるな〜。

違つ世界から。と言える雰囲気ではないので、ヒツカ信じてもう
れる氣もしないので、

『二ネベから來ました。』

標識で見かけただけの街ですが。

『二ネベ? 森の向こうのか? お前、森を越えてきたのか?』

『えつと…お姉さんが…』

標識の近くに落としたんです。

『そつか…。今じゃ二ネベも戦地になつてるようだな。姉がな…。』
よくわからぬ勘違いしてゐみたいだけどいいか。

疲れだし。

いや駄目だ、キット君涙ぐんでる。すまん!この世界には私の家族
はいなんだ!

『家族はこの世界にいないんです。』

自分のせいでもないのにキット君への罪悪感でいっぱいだ。勘違い
ポーめ!

『…そつか。もういい、大丈夫だ、しばらく泊まつていけ。それ位
しかしてやれないがな。』

いや、そういうことじゃなくて、…もつ面倒だ。頭がクラクラする。

泊めて貰う以外、道ないじやんぢつせ。

ポーちゃんにお礼を言ひと頭を下げたとき。
視界がグラつとした。

あれ、なんだか目の前が暗く…？

『おい！？どうした！おい！』

私の名前は「おい」じゃない…と思つたのを最後に、私は氣を失つ
た。

魅力の効果（後書き）

人の名前忘れちゃった時、「ねえ」で誤魔化しませんか？

一度話しただけだと覚えられないんですよ。。

新能力

* side キット*

あれ、見覚えがあるかも知れない。

そう思つて、逃げている猫を追いかけた。けど人違いだつたみたいだ。

眺めていると、その猫は前を塞がれ立ち止まつた。

あ・・。

銀色の毛並み。

見たことがある。

よくわからない、なんでか見たことがある感じがした。助けなきや、と思つた。

きっと初めて街にきた猫なんだろ？し、師匠もきっと^{かくま}匿つてくれるだろうから大丈夫だろ？

よし。

『お姉ちゃん』

彼女は何か考え込んでいるらしく、返事がなかつた。

『お姉ちゃん！』

まだ考えにふけつている。追いかけられてるのに余裕だな、あのお姉ちゃん。

いい加減気づいてくれないとあいつら戻つて来るのに。

『お姉ちゃんつてば！』

軽く風に魔力を乗せてみる。

相手の魔力で軽減されちゃうけど、普通はこの強さなら肩を叩かれたくらいにしか感じない。はずだ。

『「えっ…ビビ、どうしたんだにゃ…』

やつと気づいたみたいだけど、なんでか変な訛りが入ってる。

『いや、って…まあいいけど。僕について来て、早く!』

急いで駆け出す。師匠の家を田指しつつ、万が一の為に方向が分からぬよう遠回りした。途中何度か抜かれて驚いた。でもゼエゼエ言つてゐるからやつぱり辛かつたみたいだ。

散々路地を走り回った後、師匠の家に連れていく。師匠の家は防犯設備がいっぱいあるから引っかかるか不安だつたけど、彼女は気づいているのかいなかつた。自然体で入ってきた。

・・・僕は物凄い手練を誘い込んでしまつたのかも?

でも師匠が、僕が来たことには気づいたのに彼女が居ることがわからなかつたみたいだから、つまり、師匠がいつもかけてる“索敵”^{サテ}が感知しないくらいに魔力が弱いことがある。

それに戦士系の体躯でもないから…。

師匠に彼女を会わせた。

師匠の顔が厳しくなる。匿つてくれるか少し不安になつたけど、事情を聞いてあげていいからきっと平氣。あの時みたいに渋々でも泊めてくれるだろう。

彼女の話によると、二ネベから姉と共に逃げてきたそうだ。1人きりなのを見れば、もう後は分かる。辛い旅だったみたいだ。天涯孤獨になつてしまつた猫なんだと思うとすゞく可哀想だつた。最近の二ネベの荒れようは僕でさえ知つている。

「……」でゆつくりすればいい、なんて考えていた。

本当は、そんな悠長に構えている暇なんてなかつたんだ。
気付いたのは、気丈に振舞つていた彼女がパタリと倒れてからだつた。

え、そんな、だつて……。

慌てる僕を落ち着けるよつ、
師匠が静かな口調で言つた。

「体力の消耗が異常だな。相当気を張つっていたようだ。キット、布
団に運ぶぞ。そこで治癒魔法を掛ける。」

走つていたのは、きっと無理をさせてしまったんだ。僕が、倒れさせた……。

「何してゐる、早く運ぶぞ。俺の背中に乗せろー。」

そうだ。早く運ばなくちゃ。

ぐいっとこぼれかけた涙をぬぐい、軽い彼女をくわえて師匠の背中に乗せた。

柔らかな日差しと、小鳥のさえずりが聞こえる爽やかな朝。爽やかな風が、ゆるりと顔を撫で過ぎる。

そんな気持ちの良い一日の始まりに、私は頭の鈍痛で日を覚ました。

「うーーー、誰か頭痛薬とつて…。」

『あーーお姉ちゃん起きた？ 頭は平気？』

ん、おかしくはないってないかな…?えっと、誰。

ああ、猫、うんと、そう、ピット…?君…?

「めん後5分寝させてくれ…。

つーー違つ違つーー何言つてんだよ私は。キット君だ。
スマーフやつすざしてんな。

ひとまず起き上がり、ふかふかのクッショソの上で伸びをする。なかなかいい気分だ。

でもここはどうだ。干し草というか、お田様といつか、暖かい匂いがする。

『キット君? ここにいるかな?』

記憶が途切れでわからぬ。この部屋に案内されたつけ?

『お姉ちゃん、覚えてないの? 倒れちゃったんだ。すっごく心配したんだから! 師匠も心配してたんだ、もう丸3日も寝てたよ! 急いで寝室に運んだんだ。』

『ごめんね、誰かの寝場所とつちやつたかな。』
絶対キットかポーちゃんが寒い中寝たに違いない。

『平気、師匠は寝場所がいっぱいあるから。待ってて、今呼んでくる。』

ポーちゃんの寝床か…。まいいや、いつひらつせい。

と思つたら急ひらりを振り返り、

『お水はそこだよ』

…重ね重ね申し訳ないです。

程なくして、ポーちゃんを連れてキット君が戻ってきた。

スルツと足音も立てず近づいてくるポーちゃん。猫すげえ。

『おい、大丈夫か? 3日も寝込むなんて。』

『すみません、私も何だかよくわからなくて。でも体調は万全です。』

『ああ、見る限りは大丈夫だな。後、一つ聞きたいんだが、』

ぐぐう、わゆるるる~

・・・遮つて『めん。

うあ恥ずかしい。

『…とりあえず食事が先か。』

『手伝います。』

『いやいい。用意したらキットに呼ばせる、下に来い。歩けるだら
う~』

『はい、ありがとうございます…。』

下手に病人扱いされなくて良かった。でもキット君が半泣きになっ
てまで笑いをこらえてる姿に泣けてくる。

そして2猫ともいなくなり、私だけがぼつんとクッシュンの上に座
った状態で残された。

え~と。これはもう一度寝とけって意味?もつ眠れなによ、3日も
寝こけてたんだから。じつじよつかな。

ん~。魔法の使い方とか考えるか。

マダンテとかやつたらどうなるんだろう。

止める。

!~キラキラしいイケメン美女神さん~

なんだよその呼び名は…

ここザナドウじゃないよイケ神さん。

縮めるな!

コース教えて?池さん。

いい加減名前ネタ止める。それと、マダ…何とかなんて考えるな。

マダンテは駄目なの？

ああ。魔力全放出だろ？魔力は生命力と直結してるから、使えばお陀仏か良くて瀕死だ。その上お前の魔力じゃこの星ひとつ焦土と化す。瀕死で生きられる環境じゃねえな。

ひええ！マジか！

実は今回、姉貴のミスを伝えに来たんだ。お前の魔力は俺の担当だからな。

ホワツツ？もう十分良くして頂いてますけど？

ああ、能力に大して違はない。というよりは得してる。容姿の問題だ。

人間の姿は完璧でしたけど？やつぱり何かの間違いだつたんですか？主に年齢で？

人間の姿はあれでいい。猫の方だ。黒猫って言つたらしいけど灰猫になつてるだろ？

そっちか。

それは別の猫の姿だ。輪廻の時に入れ替わつちまつたみてえだな。どの猫と入れ替わつてるかは分からぬ。もつとも、見かけだけでは他は何も無いんだ。ん~、お前はちょっとアルカディアの魔力が使えるようになつた。それもかなり低レベル、下の下か。

え！じゃその誰かさんは困つてるんじゃない？

だから、容姿だけだと言つただろ。肉体維持に必要なアルカディアの魔力が器である肉体に付隨していた、それをお前が貰つた。相手にはお前の肉体がいつたから、肉体魔力はないはず。というからしない。桃源郷の体だからな。

えつと、よくわかんね、その猫はどうなるの？

ほどんどう害はねえよ。実際氣づいてから3人で手分けして探したがな、異常はなかつたよ。

「めんやつぱよくわからん。つまりどうこと？」

はあ…。相手の奴は魔力を使わなきゃ生きていけない体が、使わなくてもいい体になつてんだよ。

差がわからないけど…。大丈夫なんだね。

で、お前の体を直しに來た。

どゆこと？

オマケだそうだ。姉上が、トリー・メントのお礼をしろつて言つてるからな。全く…。お前の体も魔力を使わない桃源郷の体质に戻して、アルカディアの魔力許容量を肉体魔力分残しとしてやる。んと、ちょっとアルカディアの魔力も使えるようになります？

おう。もう終わつたぞ。じゃあな。

ええつーもう？ちょっと待つて！まだ聞きたいことがあります！

直後。

キイ、ときしづむよつな音がして戸が開いた。

『お姉ちゃん、ご飯だよ！大丈夫？』

おああー！ピット君…だっけ、驚かせないでよー…

今行くつて~。

『お姉ちゃん？』

ああそりゃ、心読めないのか。

全くあの神様たちはどかどか心の中に踏み込みおつて！今やつと気づいたけど！

『今行く。呼びに来てくれてありがとう。』

ふんわりした居心地のいいクッションから降り、キット君、ああそりゃキットだ、の後をついて階下に行つた。ううん、いい一オイ！

新能力（後書き）

キットはまだまだ子供です。多分。
師匠との関係はもう少し先の話で。

*

御感想、ありがとうございます！
どこで答えるのかわからないのでここです。

> 晓 粒様

まだ主人公は異世界を実感してません。
もう少し時間が経つたら変わってくれると思います。
…私の筆力で書けるか不安ですが。。

猫又はこちらのツチノコと似た感覚です。
アルカディアでは諸説紛々。

*

更新はこれから不定期になります。

出来るだけ早く書くつもりですが、急に忙しくなりまして…。

すみませんm(—_—;)m

朝食（前書き）

内容が薄い話です。全く無意味ではないですが、主人公は可愛さ絶対主義者なので暴走。でもの一まるだから許してやってくださいな

朝食

テーブルにはほかほかと湯気をたてる黄金の半熟オムレツが乗つていた。

金だゴーリドだ！

うわあ～美味しそう～！

ポーちゃん（仮）料理上手いね！

普通に猫まんまかと思つてた。

つてことは、あのふにふにの肉球でフライパン握つてんのか。
ああフライパンになりたいっ！

悶々と肉球の愛らしさに思いを巡らしていたら、キット君が訝しげ
な顔をして私
の顔を覗き込んだ。

やば、よだれが垂れてたかな？

『…お姉ちゃん？』

『早く席について食べろ。』

弁解する暇もなく、ポーちゃん（仮・・・もついっかポーちゃんで）
が三角巾を取りな
がらこっちに歩いてくる。

猫つて三角巾の意味がない気がす…

……！

ポーチちゃんーその猫用Hプロンビード買つたー。
ねえなんでHプロンなんて着けて2本足で立つてゐる、狙つてんの?
可愛すぎるが畜生あお！私の完敗だあ！
うわああ撫でくつまわしたいいいいつ

心の中で萌え転がっていたりキット君同様ポーチちゃんにも説しげな
顔をされ、正
気に戻つた。

・・・ええ、今の私は頭がお花畠だったと認めます。
すみませんでした。

じゅ、仕切り直しや。

『おはようございますー。』

なんとも白々しく挨拶してみる。挨拶は大事つてお母さん言つてた。
主導権握る
為に。

『あ、ああ。』

軽く面食らつたポーチちゃん。

が、すぐ立ち直る。む、早いな。

とつとと座れ、と無言の威圧をかけられ、すぐさまキット君の隣に滑り込んだ。

キット君、眉間にしわが寄つてゐるよ。心読めるんじゃないの？

間もなくHプロンを外したボーチャンが座り、朝ご飯が始まった。

では早速。

『頂きます！』

ん？ 気のせいか暑くなつた気がする。今日はいい天気だね。

あれ・・・？？？

…ね、みんな。私、体に4つの穴があきそうなんだ。

みんな田からビームが出るんだね、私は熱くて出来なかつたよ。

『その呪文は…？』

『お姉ちゃん……？』

2人して臨戦態勢。毛が逆立つてゐる。そして何でか寒い。さつき暑かつたよね違つたつけ？

あ、もしかして。

『頂きます？』

無言で首を縦に振る2猫。可愛い。

挨拶はトリップジヤお決まりか。仕方ない。おはようございます。だつたのになあ。

『頂きます、つていづのは作った人と食べられる命に對して感謝する言葉で、私の育つた所の慣習なんです。』
そしてこれはお母さんの受け売りですが何か。

『そうだったんだ～。』

話の途中から落ち着いてきたキット君。やつぱり可愛いなあ。

『そうそう。わかつてくれた』食前の呪文か『ダメだここつ。

その後、何とかして誤解をとぎ、ひとまず書はないと納得させた。

どうでもここからオムレツ食わせてトカー。

因みにキット君は最初の説明で理解したのに助けてくれなかつた。

隠れとかコノ

ヤロウ。でも可愛いらから許す。

『ふむ、つまりは食品に對して祝福の祈りを捧げ、自ら元気の加護をかけるんだな？』

『…はい。しつこいな。呪いた。祈りに変わったんでもうこよ。アーメンな感じだけね、それじゃ。』

ブツブツ呟く。ポーちゃんを尻目に、微妙に冷めたオムレツに口をつける。行儀悪いけど、猫だから許してもらえると信じてます。はふはふ食べて、ポーちゃんに美味しい美味しいと連呼。

『そんなに美味しいか？』

ええ、美味しいですとも！

味は完璧オムレツ。チーズがとろけてて最っ高でしたよ！

朝食（後書き）

まだ食べ始めたばかりな上にお礼も言つてないよコトヤツ・
とりあえず次はポー改めクロサイドで書くつもりです。

弟子（前書き）

更新遅くなりました。見捨てないで下さるゲテモノ好きな貴方様に、心から厚く御礼申し上げます。

今回、小難しい事を小難しい野郎に語らせたのが間違いだった気がします…。

読み飛ばしても、後で主人公に理解させるので平気かも。

読みにくい場所を訂正、「迷惑をおかけしました

弟子

* side クロ*

この猫には治癒魔法が効かない。
寝かせた後に試したが、やはり効いていないようだ。

今日、急に目の前に現れた、美しい銀猫。

“索敵”で探査不能だった事で、予想はしていた。

少なくとも現時点において余剰魔力が存在しない

といつ事を。

治癒魔法も“索敵”も肉体魔力に関する魔法。

特に“索敵”は最小限の魔力消費で常に発動し続けられるよう、俺
が構築しなおした呪文だ。^{スペル}

特徴など知り尽くしている。

“索敵”的感知する肉体魔力は全ての生命体が宿し、常に身体から
多少溢れているものだ。その無い者は存在しないと言われている。

無い場合、余剰を身体へ戻す治癒魔法がない。つまり、一般には対処法がない。

一般には、だが。

キットには治癒が効いたよつて見せかけ、ねぐらで戻りせる。

その後、台所の奥の小部屋に行き、少し考えてから特別に調合した
ボーション
薬剤の小瓶を取り出した。

あの猫が俺と同じなら…

2階に上がり、寝かせた部屋にそっと入る。

肉体魔力はギリギリなのに毛艶の良い猫に、先程の仮定が確信に強
まつた。

弱い粘性を持つ薄い橙色の液体を匙さじに掬すくい、ゆっくりと口に流し込
む。

顎を持ち上げ、嚥下させた。

途端に嫌そうに眉を顰しかめている。

そうか、不味いか。でも我慢しろ。倒れたお前が悪い。

ボーション
薬剤が効くかどうか、じぱりく様子を見ようと思っていた。が、見

る間に顔色が良くなっている。

これなら明日の晩には目が覚めるだろ？。

・・・お前、ここに来て良かつたな。違う場所なら実験材料にされてたぞ。

いや、もしかしたら…もつされていたのかも知れないな。

瞼を閉じた世間知らずな銀猫…しきりにポーちゃんと呼んでたな…知り合いに似てたか?

1人話しかけながら、未だに名前を知らない事に思い当たった。起きたら訊いてみるか。

この時の俺は知らなかつたが、

その後2日間、^{ボーション}薬剤を飲ませ続ける事になる。

とはいえ健康なのだ。ただ目を覚まさないといつだけで。

流石の俺も少し焦つた。

何故健康なのに目が覚めない?

問題は^{ボーション}薬剤だ。原料こそ安価だが調合に1月かかる。このまま行けば後2日だろう。

養分も足りていらない筈だ。

明日。3日田中で起きなかつたら悪いが精神潜行インフレンジメントで無理でも起こすと決めた。

恐らく戦火の中見た景色や覚えた感情が、精神に絡みついて解けないに違いない。やりたくはないけれど、待つていて身体が参るのは本末転倒。

ああ…一体俺は何度禁術を犯すんだ。

とうとう今日で薬が切れる日。

森で覚悟を固めつつ魔草の採集をしていたら、キットが走ってきた。

・・・田を覚ましたのか？

『師匠！田を覚ましたよう！』

『怠惰な奴だな…やつとか。』

田を覚まして、本当に良かつた…。全く…居候が心配なん
てかけるな。

部屋に入つたらすぐ、寝床から頭をもたげた彼女が見えた。

顔色も随分よくなつたようだ。

肉体魔力の異常と名前を質そうとしたのだが、ひとまずは朝食を作つてやる事にした。

目の前で腹を鳴らされたら仕方ない。やれやれ、いい加減面倒を掛けてくる猫だな。

すぐに魔法で調理を行う。本当は人型が一番作りやすいが、魔力消費が激しく、せいぜい10分しか保てない。

まあ魔法でもそこらの家よりは格段に良い料理ができる。今回は簡単に卵でいくか。

朝食が出来たと言つて呼ぶと、しばらくしてから下りてきた。
俺の運んでいる自信作を今にも食いつきそうに見つめている。

俺が初めてキットに魔法で調理した物を食べさせた時、当初は本物の食べ物なのかと疑っていた位だつた。こんな真っ黄色な食物などないと。

でもコイツは見慣れているらしい。・・・人間の下に居たんだな。

極めつけに、聖靈への祈り。

『イタダキマス』の意味は分からぬが、言つた瞬間に純粹な魔力の奔流を感じた。

整つていて決して不快ではないが、この量を一気に操る能力は異常

だ。母猫がここまで教えるのは有り得ない。魔術士、魔導士あたりだろう。

ここまで考えた所で急に肩を叩かれた。

『ん? どうした?』

『ポーちゃん天才ですね! 今度はデザートもお願いします、何でもしますから!』

随分と・・・元気になつて良かつたな?

『でざーとが何か知らないが努力しそう。だから先払い自分で自己紹介を頼む。』

不意を打たれたような顔。
お前・・・忘れてたか?

『えつと、ええ・助けて下さつてありがとうございました。おまけに3日間お世話していただきまして。私は、シーク、シーク・ヒーラギです。』

『シーク。』

『どこのハイラル・・・じゃなくてシークです。』

『シーク、だろ?』

『だから、シークじゃなくてシーク・・・すみません、シークで構いません。』
『シークお姉ちゃんだね!』

訂正箇所が分からぬが、シークといつらじい。男らしい名前なの
は何かあるん

だろう。

『よろしく、シーク。俺はクロシドライト。コイツがキットだ。』

『クロシドライト……クロちゃんで良いですか？』

『ちゃんは止めてくれ。クロでいい。』

『クロ……師匠。』

『師匠は止めてく』お姉ちゃんも弟子になるんだ！』『

『おーキッ』クロ師匠！私を弟子にして下せー！』『

上田遣いのシークの瞳がキラキラと輝いている。
もう駄目だ。勝てる気がしない。

『はあ、別に俺は弟子をとつてゐる訳じゃない。でもここに住むなら
手伝いはしてもいい。それでいいな？』

『はーー！』『

さて、シークの魔力をどう使つかな。

弟子（後書き）

猫又のからくりが少し暴露されました。

1話目で鈴ちゃんが主人公の名前を呼んでいる事にお気付�ですか
(笑)

さて、本当の名前はなんでしょう！

クロの説明、ついて行けました？私は無理でした
魔力の説明用ページを作った方がよいでしょうか？？
ついでに名前の由来もあかしたいが・・・地名はネタバレに・・・
うう悩ましい(*ー*)

食虫植物？（前書き）

今拍手小話を書い「つかと」画策中。
長くならなかつた小話を上げたいのです。

食虫植物？

『別に俺は弟子をとっている訳じゃない。でもここに住むなら手伝ってもらひや。それでいいな?』

『『はい!』』

クロちゃんの言葉にキット君と一緒に返事をした。

キット君も正式に認められてなかつたんだとか言つていた。

こんないい子を今まで認めないなんて・・・クロちゃんの鬼め!

んで、そんなこんなで朝食の片付けをしている。

シンクは低い位置にあるし、猫のまま洗い物が出来る。創意工夫は星5つ!

何かね、もう食器も可愛いんだ。木をくり抜いてすべすべに加工されてる。

お椀を洗つてたら小ちく『キット』とか『クロ』とか彫つてあって・

見つけた時は息が一瞬止まつた。ナーニコレ...ナーニコレ...かわいいつ魔法覚えたら名前の横に似顔絵の小さな焼印を入れようと決意した。ええ気合いを入れましたとも。

洗い物が終わつたら庭に來い、と言つていたから多分そこで聞けるような気がする。いや絶対聞く。

お田さまの下で見る庭は、最初に見た夜の庭とは少し違う。
夜の庭はうすぼんやり光ってた気がしたんだけどなあ・・・？
ぼーっと花壇を眺めていると、クロちゃんがやってきた。

『・・・トライプには嵌つてないな。で、シーク。お前は“猫又”
だな？』

シークじゃないの、椎香(しいか)なの。もういいけどね。
呼ばれる度にどこかのシーカー族、どこのお姫様！？なんて恥ずかし
さに襲われる。

いやそんな事言つてる場合か！猫又ばれどるやん！
速攻だね！

『え...と.....』

『違うのか？不可解な事が多々あるとはいえ魔力量は完全に猫又だ
ぞ？』

クロちゃん猫又！？

『つ、小さこ頃に両親を亡くしてて、よくわからないんです...』

お母様お父様、殺してしまつてすみません。娘のピンチを救つて下さい。

『ふむ・・・。“猫又”は普通の猫より魔力が高く、変身能力、あ

る一定の人性形態になる能力を持つ希少な猫。基本的に遺伝だ。変身能力と言つても、魔力は使う。だが変身魔法が存在しない事を考えれば十分特異な能力だな。』

天然記念物みたいな物？

道理で最初から猫又だつたんだなあ。なるほど。

『お前は人間に育てられたんだろう？この事は人間の間では流布していないからな・・・知らなくて仕方ない。魔力の扱いは誰に習つたんだ？』

『お姉さんが・・・少し。』

嘘はついてない。嘘は。

『姉か。姉は誰から・・・違うな。お前は誰の下にいた？二ネベには高名な魔師はいない筈だが・・・』

魔師？何だ魔師つて？猫又のブリーダーか？

『・・・。』

『名は明かせない、か。』

『すみません。』

分かんないんだ言葉の意味が。

でも、ついこの前この世界に落ちてきたからそんな怪しげな人には触つてないハズ！

『いや、単なる好奇心だ、忘れる。』

『クロ師匠は猫ま』で、庭に呼んだ用事だが・・・』

おいーと言つ間もなく、
あれに乗れ。と言つてクロちゃんが指差す。

・・・私、視力落ちた？

は、え、アレ何？食虫植物のデカいバージョンが見えるんだけども？死ねと？お前は死ねと言いたいんだね。

よく見てみると、ビーチボール大の水晶から、同じ水晶の茎が伸びている。

水晶の茎が、先に行くにつれて薄緑、濃緑、赤緑に変わっていく。一緒に透度も下がっている。植物になってるのかな？そして先端が枝分かれして、それぞれがハエ捕り草の葉をつけている。

カパッと開いた葉っぱの端のトゲトゲが、いかにも「捕食します」と主張して非常に恐怖を煽る。

『喰われる……』

『何言つてる？大丈夫だから早く乗つてみる。』

絶対大丈夫じゃないがクロちゃんに頼まされたら仕方ない。やらねば女がするぜ！いくぞ！

思いつ切り跳躍した。ら、ジャンプが高すぎて怖い。まだ浮いてるよ！？まだ上に向かってるよ！？

神様、加減をしてくれっ！

それとも猫には普通なのこの高度～！？

・・・じゃないね。

下を見下ろして、はしごが掛かっているのを見つけましたよ。
ほらクロちゃんもビックリしてるじゃんーもつー^{モツ}！
いつの間にかキット君も出でてきてるしー

色々考えながらハエ捕り草の上に降り立ち、やつぱり捕食された。
逃げる隙もなく一気に閉じた。

卑怯なりクロ左右衛門！

でも真っ暗つて訳じゃない。葉が薄いらしく、少し日が透けている。
色がちょっとエグい。

これ逃げたらダメかな。何か分泌されたら逃げよう。

少し我慢していると、徐々にきつくなりだした。体にフィットして
る感じがする。

あ～気持ちええ～。マッサージされてるみたいだ～。

縮まるのが止まつた後、体の表面にほんわかとした薄い膜が出来て
包まれた。

これって魔力？

人間になつた時は暑くなつたよね？確か。

・・・眠い。どうでもいいや。

ふわああ…

しばらく身を委ねてウトウトしていたら、急に葉が開いた。
名残惜しくなりつつ葉を下りる。はじめは面倒だから飛び下りたら
キット君がビビッてた。
撫で撫でしたい。可愛い。

早速実行につつし、散々キット君をもふもふした。
はうう気持ちいい～！

ふと振り返ると、クロちゃんが巨大ハエ捕り草の根元の水晶をじつ
と見ている。真剣にブツブツ呟いていて非常に危ない。

『クロ師匠、今は何ですか？』

『・・・魔力測定器。』

『んだけ物騒な測定器だよ！

て事は、肉体魔力分しかないから小さすぎて驚いてるのかな。ザナ
ドウの魔力は多分計れないだろうし。

『どうでした？』

『ああ・・・異常だ。』

『少なすぎですか？』

『いや・・・というよりも・・・魔力について、どれだけ知ってる?
全く知りません。』
『肉体魔力と個体魔力については?
肉体魔力は聞いたことがあります...?』
『何で疑問文なんだ。お前、本当に習ったのか?』
『少し。』

ば・れ・る!!
どうすんの、バレてもいいの?
お願い時間を止めて、泣きそうなの!

食虫植物？（後書き）

メルトが思い浮かんだ人は大正解。
こんな感じでちまちまとマニアックに…つい。
ごめんなさい(*ーー)

今回はちょっとキリが悪いんですが長いのでバッサリ切断。

魔力の説明だつたよね？（前書き）

「おひこじんなこと」と。

魔力の説明だつたよね？

当たり前だけ願いが通じる訳もなく。

クロちゃんが軽いため息をひとつついで、

『…まあいい。軽く説明してやる。』

とおっしゃった。

もうバレバレだった？てへ。

すみません大人しく話を聞きます。

『まず肉体魔力だ。これは生命維持に必要不可欠と言われている。勿論生物の身体が使う魔力量には波があるから、対応できるようにある程度の余剰が出ている。』

火力発電所の発電量も確かに真夏の最高発電量に合わせてキープして
るって先生が言つてた気がする。

それの人間バージョンみたいな感じかな？

『個体魔力は元々本人の魔力ではない。世界から吸収するんだ。肉体魔力の余剰が多い者ほど操れる個体魔力が大きい事から、余剰分が世界から吸収する受け皿の役割を果たしているという説がある。個体魔力の使いすぎは死を招く、それも証拠の一つとして挙がるな。俺は・・・俺の見解はどうでもいい。』

私、そもそもその肉体魔力とやらがないんですけど。
アルカディアで魔法使つたら即死ですか？焼印の夢はもう潰えた？

『つまり普通なら、肉体魔力と個体魔力は比例する。肉体魔力を計るだけなら簡単な装置で済むんだ。常に生産量は一定だからな。』

ふむふむ。

『だが、お前は“索敵”^{サーチ}にからなかつた。肉体魔力が生産量だけ使われているか、或いはないということだ。』

最初は普通の身体だつたはずだから、ギリギリだつたんだろうな。あの日は1日で色々あつたしな・・・。

黄昏れ^{たそが}そつになる私を尻目に、クロちゃんは続けた。

『今日の朝の具合で肉体魔力がギリギリとはおかしい。だから、肉体魔力と個体魔力、どちらも計れる測定器に入らせたんだ。』

『個体魔力も計れるんですか？』

『ああ。寝ている間しか回復しないから朝に計らねばならないし、誤差も肉体魔力の場合と比較して大きいから好まれないがな。』

『私、変な所ありました？』

『見る。』

水晶をよく見ると、うつすらと文字が浮かんでいる。

肉体魔力：000
個体魔力：050

あ～・・・異常なの？

『肉体魔力がない。それどころか一時は0以下になつていた。負の数は存在しないのに・・・だ。そして個体魔力50。これはお前の

体重など諸々の点から見て妥当とされる肉体魔力値だな。』

ん？魔力量以外に何か量つてんだ・・・？

『・・・クロ師匠。』

『そりだ、お前は『何勝手に体重量つてんだ』巴拉アー。』

何と、体重・身長・体温…等々、挙げ句インピーダンスらしき数値まで出ていた。

仮にも雌相手に脂肪率なんて出して許されると思つなよ…。

『つ、おい、『停止』『停止じやねー！今の記憶全部消しやがれ！…もうお嫁に行けない～つー…。』

わざとHALTホールトって言つたな？英語で魔法かけばいいのか！…よしあつたらあつ！

『メモリー記憶…つぶ』

『お、落ち着いてお姉ちゃん！何しようとしてるのー…。』

キット君が実力行使。口を塞がれた。

止めてくれるなキットよ。お姉ちゃんは修羅になる…。

・・・・・つてか一部消去つて英語で何て言つんだ？

『テリーートとかイレースとか、廃猫にならかねないよね？

英語がネックだぜ。やっぱり勉強しどきや良かつた。自動翻訳は英語をマスターするのとは違う訳ね。

あ・・・クロちゃんがなんだか呆然としてる。

『あの・・・すみません。』

『いや。』

『もうしません。』

『師匠、女性の体重はダメだよ。事前に言わなきゃ。』

『ああ。』

『脂肪率も出しますよね』

『ああ。』

んだと? オイ反省なしかつ!

怒りのオーラを放つ私を見てキット君が少し笑いかけてきた。
なに?

『師匠、お小遣いちょうだい』

『ああ。』

『10キルね』

『ああ。』

なる、分かった。

『クロ師匠、私にも10キル』

『ああ・・・ああ?』

私の時は我に返るのかよ。ちえつ
キット君が喜んでる。10キルってどれ位か分からんが高額に違
ない。いいな。

『悪い、聞いてなかつた。』

『師匠、10キルくれるつて言つてたよ』

『は？』

瞳孔が縦に細くなつてる。これは目が点の猫版？

『私にも。』

『それはない。』

即答か！

『とつあえず、シーク！お前、さつきのもう一度やつてみる。』

『え、しばいていいんですか。』

『しばらくまあやつてみる。』

よし。

拳を固めて…

『ゴムの銃弾！！
ペストル

『ハルト
“停止”』

お？止まつた？体が動かない

魔法だ！すごい！

・・・デジャヴ？

『さつき私にかけました？それ。』

『かけた…つもりだつたが。』

私は絶叫して魔法にかかるなかつたですね。
ごめんなさい？でいいのかな？

『師匠が失敗するなんて珍しいね？』

『さつきも今も魔力は使われてた。』

『え？』

『シーケが特異体质…の訳がない、今現に効いた。おかしいな…。』

『よく把握できないんで、魔法について教えてくれませんか？』

頼みます、私に基礎知識を！

この状態で悩まれても困るよ。

『そうだな、50じや口クな魔法は使えないから、魔術だな。』

『違がある？』

『お前は本当に猫又か？』

もうバしゃるとか心配する以前に、コッチが何も自分の事を知らないからね。

この際クロちゃんにはあなたにしておいで。勝手に悩んで。

『お姉さんも魔法…魔術？の使い方しか教えてくれなくて。』

『何で教わった？』

『ギュウッ、バンッて。後は念じる。』

『はあ？それだけか？呪文は？^{スペル}魔具は？』

『他は何も。』

『それだけじゃ 魔法も魔術も発動しないぞ、ただでさえ個体魔力許容量が低いんだから。』

『でも人間になれま』

おっとした。

『なれま？』

かくなる上はあの手を！

『すん。』

『よし、やつてみる。』

すんつてさ…すんだよ。すじゃないだろ！

名前といいこれといい聞き間違い激しいねクロナちゃんよ。

もういいや、人間の姿見せちゃうか。

魔力の説明だつたよね？（後書き）

ストック無し…恐怖。。

英語の発音を間違えるという大失態を犯しまして、少しは改善したかと思います。

ん?と思つた方、申し訳ありませんでした。

魔力の違い（前書き）

色々妄想が膨らむのに主人公の身動きが取れないのが、非常にでもかしい。

魔力の違い

人間の姿になろうとしてから気がついた。

私、まだ服装調査してないんだけど。

クロちゃんに怪しまれるから、ジーンズ＆Tシャツはダメだらう。
かと云つて全裸はあり得ないし。

シーク、ピーンチ！

・・・ってかシークの格好でいいんじゃない？何かワケアリみたい
で誤魔化せるかも。

『シーク、無理なら無理でいいんだぞ。』

む。嘘じやないやい。

いくぞ、変身・シークver.！

シュルっ

顔は目だけ出した状態で、後は灰色の布で覆われている。

青と灰を基調とし、実用的で体にきつくフィットしたデザイン。髪の毛もきつい三つ編みで後ろに垂らされている。

悲しいかな体は美幼・・・美少女だから、イマイチ体の線が迫力にかけるけども。

『お姉ちゃん・・・』

『シーク・・・』

正直自分でも完成度の高さにびっくりしてマスーやったね！

『男なの?』

・・・成功しそぎた。

『お兄・・・お姉ちゃん、無理言ひて』めんね。』

キット君、残念な物を見る日は止めよつね。お姉ちゃん心が折れてしまつよ。

とつあえず猫に戻ろう。

シユルつ

『私は男じゃあつません。』

猫の笑みなんて見たこともないけど、飛びきりのスマイルを浮かべて言ってみた。

『あ・・・うん。僕、あっちに行つてるね。』

キット君、苦笑いしつつ後退りないでくれ。器用だな。
あ……行つけやつたよ。

『別に性別はどうでもいい。変わった姿で全く魔力を使つていよいづだから、魔法じゃないな。一体何をしたんだ?』

『どうでもいいんだ……。』

『多分、本来の人間の姿に変わっただけだから?』

『本来?それは当たり前だ。他の姿になれる筈がない。』

『神様から貰つたというか…勝ち取つたといつか…。』

『魔力は?』

『ザナ…異世界の魔力です。なんてね。』

『疲れてるのか?』

「う、冗談っぽく発言したけどここまで信じて貰えないとは。

『ちょっと事情があつて、少しで済むんです。』

『少しも感じないぞ。』

『はい?』

一応変身の時に尻尾はあつたかくなつてるんだよ？

これはもしや。

『すみません、火の玉みたいな物を出す呪文スペル、だっけ？教えて下さい。

』
『“火球”ファイヤーボール”だが、強めなければ使えないぞ？』

『ちょっと確かめたいんです。尻尾の上を見てて下さいね？』

人型に変わる寸前まで、尻尾の先に魔力を集める。

『どうですか？』

『何も変わらないが？』

ほうほう。

じゃあ、尻尾に集めた魔力を散らしてから

『火球』ファイヤーボール

小さな火が尻尾から少し浮いて出た。でも尻尾はヒンヤリしている。

『どうですか？』

『普通の火球だろ？』

『いや、魔力は。』

『燃料として使われてるや。』

なるほど。こういう事は、

- ・アルカディアの魔力はクロちゃんにも分かる。魔力 자체は冷たい？
 - ・ザナドウの魔力はクロちゃんには分からぬ。魔力 자체は温かい？
- 使い分けは……念じると話すの違いかな。後で試してみようっと。うん、こんな感じかなあ。

『何か違ったか？』

『や、失敗しました。』

『そうか・・・魔力が要らない理由かと思ったが・・・。
う、じめんなさい。』

『ふむ・・・そうか。ところでお前は魔法や魔術がどれくらい使えるんだ？やはり個体魔力分か？魔力を使わないのは変身時だけか？』

いつぺんに訊かれても分からぬって！

『魔法と魔術の違いってなんですか？』

* side キット*

お姉ちゃんが変身を披露してから、師匠の雰囲気が変わった。

師匠には魔力が見えるらしいから、お姉ちゃんに何か特別な物を見いだしたに違いない。

お姉ちゃん・・・お兄ちゃんだったみたいだけだ。

男じゃないと言つて吊り上げた口元が怖くなつて逃げて来ちゃつた。家の窓から、師匠達が見える。

師匠と話していたお姉ちゃんがふと考える素振りをしたかと思つと、何かの呪文スペルを師匠に尋ねた。

何をするんだうー！

ワクワクしていたんだけど、お姉ちゃんは静かに目を閉じてこる。何も起こらない。

師匠の深緑の瞳が金に変わつてゐる。しつかりとお姉ちゃんを見据えているけど、何を観てゐるんだうー！

何も起こらないままお姉ちゃんは目をあけ、師匠ヒーラーに向かわした。

次にお姉ちゃんが発動したのは、初級魔術の初步“火球”ファイヤーボール。詠唱破棄でもない基本の基本で、どこの人間の子供もこれ位なら普通に使える。

それに、火もどちらかと言えば小さめな気がするんだ。何が特殊なのか、よく分からない。

火を消した後、また2人で話している。

しばらく見ていると、急に辺りの魔力が師匠の元に集まり始めた。
す「」
い勢いに空気も巻き込まれ、強い風が吹き荒れる。

わあ
……！

師匠がこんなに魔力を集めるのは珍しい。

魔力は徐々に自然へ満たされるものだから、一気に使うと何日かは
強い魔法や魔術が使えなくなつてしまつと口を酸つぱくして言つて
いたのに。

見に行きたいけど、師匠の周りの魔力濃度が高すぎて近寄れない。
こういう時に僕は普通の猫などと実感する。ちょっと悔しい。

お姉ちゃんは耐えられてるのかな？

クロの本領（前書き）

拍手メソッドのお返事は活動報告であります」とお返しました。
拍手＆お気に入り登録、ありがとうございます！

クロの本領

魔法は莫大な世界魔力を使って強引に世界を曲げる業。

魔術は世界に願つて個体魔力で実現させる業。

大して変わらないじゃん…と言つたら、

『魔法を見せてやる。』

とゆつくり微笑まれた。

・・・なんか気に障りました？敬語が取れた事に怒ってるんですか？

目が笑つてないのに楽しそうで怖いです！

そしてなぜか今、私はクロちゃんの張つた結界の中にはいるらしい。見えないんだけど、とりあえず謝りに行こうとしたら鼻を打つた。

せめて一言いえや！鼻血出たらどうすんだ。鼻血染めの毛皮なんて、怖がつていいいのか笑つていいいのか分からぬぞ。

諦めて大人しく眺めていたら、クロちゃんを中心に薄く水色がかつた竜巻みたいな物が出来てきた。もうクロちゃんの姿は霞んで見え

ない。

竜巻の中心でや、確かに真空に近いよね？す、こなクロちゃん！

ショーを見ているつもりで手を結界の壁につけて見ていたら、竜巻が急に収まると共に壁が溶けるように消え、またまた鼻を打ちつけた。

だからや、一言ごめんばりで。

クロちゃんの方を見ると、肩で息をしていた。
駆け寄つて大丈夫か尋ねたら、無言で頷いて地面を指差した。

違つた、地面じゃなくて宝石だった。

『これは…？』

薄い水色をした丸い宝石。

これが名高いカボーションカット（多分）！初めて見た！

『魔晶だ。見たのは初めてか？』

『はい！』

ヤバ、声が裏返つた。

魔晶つて言つのか。凄い凄い！

これ、ダイヤモンドどっちが硬いかな？でもカットしてる（？）
し…。

ああ欲しい。これ欲しい。んで調べたい。

『私に作り方教えて下さい。』

『は？』

その後、懇々とお説教された。

曰く、これは無理やり魔力を固めた物で、取り扱いが難しいとか。売りに行くんだとか。私がやつても砂くずレベルとか。

途中からキット君が戻ってきて、余計恥ずかしかった。
そこまで言わなくてもいいじゃんよ。頑張ってザナドゥのを固める
もん。

『これで分かつたな？』

ちえ。

『これつまづちも分からないなんて言わないよな。』はい・・・。

『

呆れ顔で溜め息をつくクロサエ。たつた1時間で何度もこの光景を見たことか。

よし。必殺 つるつる上田遣いを

『効かないぞ。』

まだやつてないのに。流石に毎回はダメだったか。

『お姉ちゃん、魔晶が造りたかったの?』

うんそなうなんだ。でも隣でお説教聞きながら待つてくれなくていいんだよ。

あのね、こんな可愛い子に失態を見せるのは泣けるんだ。

『魔晶かあ・・・僕はいつも見てるだけだから解らないなあ。』

『“結晶化”とかかな?どうよクロ師匠。』

『魔法だと言つただろ?、呪文を考^{スペル}えても無駄だ。』

『へ、なんで?』

『凄い自信だな・・・魔晶はな、世界魔力を操つて造る。個体魔力を操る呪語じゃなく原始の言葉を使う。』

『原始?』

『ああ、例えば』

クロちゃんが一足で立ち、無造作に右手を広げる。

『ウォーターボール
“水球”』

野球ボール位の水の塊が浮かぶ。へええ、あんな風になるんだ!重力つて美味しいの?な世界だね。物理も要らなかつたか。

『コレが魔術の場合だ。今は魔晶を作ったせいで少し小さいかも知れないな。で、コレが』

『アクアスフィア
“水球”』

・・・・・水がラテン語?
と思つた瞬間。

クロちゃんの左手に、

ビーチボールのめちゃくちゃ大きい感じの奴が。あれは人間になつても抱えきれないと思う。

つてかれ

威力の差がヒドすぎ。

やはり世界魔力が薄いか…なんて呴いてるが意味不明だよ。
クオリティーは十分高いって！

『じのように、言語が違うと威力も全く違う。』

『あの、どれ位?』

『本来ならざつと100倍だ。』

100倍!?

『じゃあ弱い方要らないでしょ?』

『使い勝手の問題だ。原始の言葉はまだまだ解明されていないから使えない上、威力調節が少し難しい。』

『少しづつ、ものすごく難しいんだよー僕も練習してるんだけど、1つ使う位で倒れそうになっちゃうんだ。』

『倒れ···っ!!』

『キツトは無理し過ぎだ。』

『大丈夫なの?』

『うん。』

『そつか、無理しちゃ駄目だよ?』

『平気だよ。ありがと、お姉ちゃん。』

はああ、可愛いねえ。目がキラッキラしてて。悪い人について行つ
ちゃ駄目だからね。

···なんならお姉ちゃんとここに来る?

原始の言葉だろうが何だろうが頑張つてマスターするからさ?

あ、そうだ。これ聞いておかないと。

『普通の人は使えたりします?』

『人?微妙だな。魔師···魔術師や魔導師の事だが、そいつらは使えるが、一般人は魔力が足りるかどうか。』

『足りないとどうなるんですか?』

『良くて発動停止、んで氣絶するな。』

ところ」とは最悪の場合・・・。

おっけ、魔法は何とも危ない代物だと認識した。

だが、やらなきやならない事もあるのむ。

『キット君、魔法が使えるお姉ちゃんは好き?』

『シーク、何言つてるんだ!?』

クロちゃんはまだもふもふ出来る仲じゃないから聞けないし。
勿論いつかはもふもふやりますけどねー

『うん、カッコいいよ。』

『そりゃあ、そりだよね。クロ師匠、といつ訳で魔法と魔術教えて
下さい!』

『それ位の覚悟で…』

怒り顔で口を開いたクロちゃんが、なぜか少し逡巡して口を閉じた。

あれ? てっきりしなめられるかと思ったのに。

また開いて、

『わかった、教えよう。授業料はきつちり貰つからな。ボーキョーン薬剤分も。
払い終わるまでは俺の指示に従え。』

『はい!』

『じゃあ、夕飯を作れ。もう遅いから明日教える。』

いいよ、夕飯ね！なんて軽く安請け合いでいたまでは良かつたけど、まさか魔術でやらせられるとは・・・。

英語の試験より格段に辛かつた。包丁なんて英語で言えないよ！

クロの本領（後書き）

誤字脱字はお知らせください。作者は只今38歳の熱を出しています。
夏風邪はなんとか、です。

因みに包丁はキッチンナイフでOKです。安易安易

異世界の夜（前書き）

シリアルアスなので短いです。
昨日拍手のお返事をし忘れた上大矛盾を見つけたので修正いたしました。

異世界の夜

* side クロ*

1日で色々あつたせいだろう、キットもシークも早々に床に就いたようだ。

だが、俺はなんとなく眠れずにいた。

庭に出て、空を仰ぎ見る。

満月に一步足りない月が明るく照らしだす。

薄く光る幻想的な庭は、キットの努力の賜物だ。俺1人だった時は、
トランプ
餓ばかりで雑草は伸び放題の荒れた庭だった。

最初は反対したが、綺麗な庭になつてみれば悪くないと感じる。

玄関の階段に座り、ただ何も考えず眺める。

ふと、奥に一際光る影を見つけた。またキットが新しい花を植えたのかと思い、視線を向けると・・・動いた。

侵入者！

『 ホールド
“停止”！ “静寂”！』

とつさに動きと口を封じる。
急いで影に近づいた。

『・・・・・お前か。寝てたんじゃないのか？』

そこに居たのはシークだった。全く俺に気がついていない。それどころか魔術に掛かった事にも気がついていないようだ。
微動だにせず、一心に木を見つめている。

確かに今が花盛りだが、そんな珍しい木ではない。

シークは黙つて薄紅の花弁がはらはらと落ちていく様を見守っている。

銀の毛並みが月の光をはね、風景とあいまつて精巧な絵画のようだ、
と思つた時。

かさり。

不用意に踏んでしまった植物が、音を立てた。

途端にシーグが振り返る。その眦からは涙が溢れそうになっていた。

『・・・どうした。』

『何でもないよ。この桜キレイだね。』

無理に笑おうとして、顔が歪んでいる。

『サクラ。』

『ああ、元いた所では、この花を桜って呼んでたんです。私の国の花で・・・最後に見た景色がこの木の花吹雪でしたから。』
後ダンプね〜、と言つて顔を背けた。

『そとか。』

ダンプ・・・が何だか分からぬが、彼女の家族の命を奪った何か
だろう。

『こんな些細な事で寂しくなるなんて・・・あはは。ちょっと引き
ずつてるんです。まだ踏ん切りが着かなくて。いやはや、ネチっこ
い性格は嫌ですね。大体私らしくないし〜。』

饒舌に話しあうシーグ。決してこひびき顔を向けようとせず、軽い

口説で話す。

やれやれ。そこまで耐えなくともこことここの上。

『親^{ちか}しい者が居なくなつて簡単に諦められる奴はいない。』

『うん…』

『でも一人で耐えなくていいんだ。少なくとも今お前の周りには、俺とキットがいるだらう。苦しいなら苦しこと言え。いくらでも一緒にいてやる。』

『誰もお前の悲しみを取り除けないかも知れないが、共に背負ひ事は出来るんだ。』

言い切つてからシーケの正面に回つしむ。

涙は止まつたようだつた。

『クロちゃん…。』

『なんだ。』

『今、口説いてた?』

・・・・・は?

『なんぢちゅうて』

ありがとう。

ぎつぎり聞き取れる位の囁き声が聞こえた。

そして唐突に、

『じゃあ疲れたからここで寝かしてね。』
と言つて、木にもたれて寝始めてしまつた。

なんだつたんだ。

拍子抜けしたが、幸せそうな寝顔を見ていたらそんな事はどうでも良くなつた。

今は穏やかなこの時をゆづくじ過ぎないせばいい。

俺もシークの横で一眠りしよう。

異世界の夜（後書き）

「めんなさい。本当に」「めんなさい。
シリアルは苦手なんですよ心底。

修行は要らない？（前書き）

修行部分は書かないと…と思いまして書き直しました。

修行は要らない？

まじり起きる／＼

夢と現を彷徨^{ひなまわ}いていたら脳内に大音声でコルい声が響いた。

お、イケ神さん。

久しぶり。

いやいや、久しぶりって…まだ1週間経つてないし。
まあな。いずれにせよお前にやいい知らせだ。これやる。

言い終わるや否や、いきなり固い物が落ちてきた。ちょっと待て、
これってさ、

電気辞書だ。嬉しいだろ？

電子辞書でしょ。てか要らん。この世界では役に立たないし。
中開けた？

だつてこれ私の使つてたやつ。入つてるのは、広辞苑とか…と思いつながら開いたら。

魔導書大全…だとお…！来た！来た！ナイスファンタジー！
要らないなら持つて帰ろうかなあ。仕方ない。
待つてええ！許して下さいごめんなさい！

といつのは冗談で、使いやすくておいたから説明するな。

冗談……、お願ひします。

まずは魔導書。緑、赤、茶、黄、青・つまり木、火、土、金、水の基本5属性だ。プラス黒、白、血、召喚、禁断がついてる。知らないで全辞書検索で火の玉だの光の柱だの打てば見つかるから。プラスつて、あつさり流していいのかな。駄目だろ。で、オリジナルのために英和と羅和辞典。文章にした方が強くなるから、お好みでつてな。

ラテン語？

気付いてるだろ。原始の言葉だよ。英語が呪語。なるほど。じゃあなんで訳す方だけなの？

とりあえず相手の詠唱だけ分かりやいいだろ。私も使いたいんですが。

ラテン語使つて魔法やるなら日本語でやつた方が早いし効率もいい。しかもお前は念じるだけで自分の話す言語を変えられるしな。日本語！いいね。ちょっと使うの大変そうだけど。

次はステータス。お前自身のザナドウとアルカディアの残魔力量だ。加えてカメラで撮影した相手の魔力、体力、知性、俊敏性、使つた魔術・魔法で主要なもの、名前もわかるつづ一代物だ。へえー！

試しに自分に向けてパシャつ。

ザナドウ 魔力・エラー

アルカディア 魔力・025

魔力・D
体力・エラー
知性・エラー
俊敏性・エラー

魔術、魔法履歴・火球、変化

名前・柊 椎香

何だろう、この切なさ。

体力と知性のエラーはきっと低すぎだからじゃないかと思ひ。絶対そうだ。泣きたい。

お前相手に計るなんて想定してないからな、あははは。

・・・さいですか。私は尋常じゃなく馬鹿ですか。

でも読み手はお前相手だぜ？日本語はなかなか読めるもんじゃないし。

ん？話せる人はいるの？

極少数だがいるぞ。一握りの魔導師だな。魔札職人で日本語が書ける…奴もいるか。

日本語知ってる人！？会いたいです！

誰かに教えてもらえ、じゃ

え、待つ、この項目は？

それは見りやわかんだる。料理レシピに、商品の価格レート。

こんな時代にレート。

悪い奴には引っかかるなよ。と、言い忘れてた。電気辞書、お前の脳内にしまつとくからいつでも出せるんだ。またな。

ブツンと途切れる音が聞こえ、何も聞こえなくなつた。

待て！

『頭にしまつとか！』

絶叫で目を覚ました。
目を開けると、昨日の桜っぽい木の下。死体埋まってないよね。まさかね。

隣にはクロちゃんが寝てる。起こしかね……。
まあ、あの、絶叫してスミマセン。

朝の風に黒い毛がそよぐ。光が暖かく差し込んで、優しく照りす。時たま耳がぴくりと動いている。

あー穏やか……。

あー…………つ何ですかその無防備さ！撫でると愛でると？枕にしどと？
くたりと脱力した姿が抱き枕の觀を呈してゐるよー

必死で触るのを耐えていたら、クロちゃんが目を開けた。

あ…。

パツチリ田が合った。私が覗きこんでいたせいだね。ごめん。

『おはよう?』

クロちゃんがフリーズ。

一拍置いて、返事が返ってきた。

『うわーいります?』

そこで敬語を指摘つ!
……ん?

『おはよー!…おはよー!へ.』

ブツブツ独りで話してます。正直怖いよおい。

『おはよー、つて言わない?』

『いや、久し振りに言われたなと思つて・・・』

『久し振り?』

『夜は魔力が抑えられなくて、無意識で・・・』

そこで寝ぼけ顔クロちゃんがガバッと跳ね起きた。

『お前、怪我は!』

『何を急に?』

『殺してしまったか。夢枕に立つなんて・・・。どんなに詫びれば
よいか!』

待て、わたしゃまだ生きとるよ。ピーンピーンだよ。

『一体どうしたの?私はまだ生きてるよ。』

『すまないが、お前はもう死んでい』

ダメええ!それ言つたら何か分からぬけど何かがヤバい!

△ 口閉じりつ

思わず日本語で言つたら

クロちゃんが吹っ飛んだ。

ヤバいやばい、攻撃になつてしまつた。
二次災害起きてるし。

着地点にはキット君とクロちゃんが伸びていた。

こんな事つてあるんだね。あはは・・・ごめんなさい。

走り寄ると、完全に気絶していた。

今こそ辞書かな?

取り出して起動。

力タ力タ。

検索くく癒し、と

青」治癒

癒しの水

リヴァイアサンの巣

白」光の加護

絆の守

天使の微笑

黒」癒せぬ傷

血」犠牲

召喚」アスクレピオス

インドラ

ウンディーネ

何だこれ・・・。

・・・・・

まず第一に仰々しい以前で分からん。しかも癒しで引いて癒せぬ傷つて酷いな。

とつあえずベホマはないの?

ケアルガでもいいけど。

ま、治癒でいいかな。

なになに?

「強く念じて、ホイリーヒ叫ぼつ! 治癒っぽい奴発動するよー。」

・・・書いた奴出て来い。

じゃあ天使の微笑は?

「強く念じて、ケアルラーヒ叫ぼうー。」

ケアルガじゃないのね。分かった。もういい。

「治れ」

最初から日本語すれば良かつた。全く。

修行は要らない？（後書き）

『猫語』

「人間の言葉」

〔日本語〕

“呪文”

で分けることにしました。紛らわしくて済みません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9531m/>

猫になって

2010年11月14日01時28分発行